

とある休み時間のことだ。

授業終了のチャイムが校舎中に広まって、慌ただしく椅子を引きずる音とか、子どもたちの騒ぎ始める声も、水の波紋のようにゆっくりと、けれど一瞬で広まり始める。僕は机の上を鉛筆や消しゴム、さっきまで使用していた教科書、ノートを散らかしたまま廊下へと逃げた。他の教室のドアが開き始める音が廊下にたくさん響いて跳ね返り、張るような冷たさの漂う空間にも、僅かな温かさがにじみ出しているように思える。

あつという間に騒がしくなった廊下をすり抜けるように、足を動かして向かった先は屋上付近の踊り場。ちよつと肌寒くて、日当たりの悪い陰鬱な所。

そんな寂しい場所に、ただ一人と、一名を除いて、訪れる人はいない。

もちろん僕と星だ。もちろん、それでいいのだ。

「ねえ、」

踊り場にしゃがみこんでいた僕に、星の声が降り注ぐ。

別に休み時間の毎に集合、とルールを決めたわけでもないのに、僕たちは自然とこの場に来ることが癖になっていた。いや、癖というよりは宿命だ。ここに来れば星に会える。ここに来れば僕に会える。そんな幻想めいた、けれどどこか理想めいた憧れに出会える場として、僕たちは理解していたのかもしれない。

僕たちには暗黙な事が多すぎる。

それが、心地良い。

「近くに星がたくさん見える公園があるんだって。知ってる？」

僕が顔を上げると、星の顔があり、目と目が出会った。

「うん、知らない」

屋上へと続く重たい扉から差し込む空の色、光が星の笑顔だけを照らして、その他全てを黒く染めて影を作りだしている。星の瞳に映る青い外の色は、太陽の線から放出され創り出される色というよりも、見えない星々の輝きがそのまま色になったような感じで、透き通るような白。空は、光で満たされている、はずだ。

星が僕の隣に腰かけるのを見届けてから、ようやく視線を外して、廊下に佇む影へ。まだ星の姿が眼に焼き付いているようで、うつすらと白い陰りが、影そのものである鉄筋コンクリートの黒に映し出されている錯覚を受けた。

「西原自然公園」

「え？」

「星が見える場所」

——西原自然公園。どうやらそれが星の見える場所の名前らしい。

「割と近くにあるみたいなの」

そう言って目を細めて笑った星は、まるで欲しいおもちゃが手に入ったような様子だ。

そのおもちゃは……二人用である。いや、正確には僕と星だけのおもちゃであり、遊び場であり、癒しの場なのかもしれない。この踊り場みたいに。

『子どもである僕たち』以外は絶対に興味を示すことの無い、遊び場——星の見える場所。

そして——

都内にも星が見えるのかなんて、あるんだ。それがうっすらと滲み出た感想だった。

どこまでも広がる藍色の空。

そこに輝く白い粒。

自分の本当の目を通してみることに無かった世界を掴めることが出来るのかと、こうもあっさりと思ひ出すことが出来るのかと。それは純粹な嬉しさと——若干の不安。本当に、そんなにあっさりとうまくいくのだろうかという物だ。

たかが星程度でこんなに複雑な感情を抱く小学生なんて、きっと僕くらいだろう。というより、中学生、高校生、社会人ですら、こんな感情をふつふつと巡らせることは、なさそうだ。

「どの辺？」

そう尋ねると星は考える時間も無くあっさりと返答する。

「西東京」

「じゃあ、近いね」

陽気に声を弾ませて、僕は眼を閉じた。

僕の真つ暗な目蓋の裏はスクリーンとなつて、異世界へと飛ぶ。僕と星が、二人で、空に瞬く星々を、凜と佇む月を眺める程度の異世界。簡単になし得ることの出来る、けれど並行世界の一つみたいな世界。地に足が付いていないように曖昧な世界だが、それは本の中でしか星空というものを見たことがない感覚と似ている気がする。女の子と二人で、しかも夜に出かけるなんてこと、僕に出来るのかな、って。僕はいたって、普通の男子である。それらを異世界と呼ばずに何を異世界と呼ぼう？

だからこれはまさに、夢物語だ。

星空のことも、これからのことも……。

ちっぽけな子どもである僕たちは、あの星空へ、いくら手を伸ばしても届くことはない。

絵の中の幻想を掴むことなんて出来やしない。

だけど、一緒に見上げることは出来る。

一緒に見上げ、あれが何の星で、あっちが何の星で、って、他愛も無い会話をするんだ。

どこからか引っ張ってきたような胡散臭い星の神話とか、そういうのも交えて、僕たちは笑い合う。

きつと、絶対、星空に伸ばした手は藍色の空間しか掴むことしか出来ないけど、

僕の隣にいる、小さな女の子の、小さな手は、こんなにも近くに、在る。

暗闇のスクリーンに映る僕は、星夜に照らされ影となった少女の手を、そつと握りしめた。決して離さぬように。

「どうして笑ってるの？」

そんな星の言葉に、僕は我に帰った。思わずただいま、と言ってしまいたくなる安心感が、心臓から血を送り出すような感覚で一気に広がったのだった。心地良い場所から、安心感へ。この上ない至高である。

「いやね、ちよっと旅行に」

自分で言っておいて、なんてキザな台詞だ、と思った。

「旅行？」

「うん。目を閉じたらさ、真っ暗になるでしょ？ そしたら自然と、星空とか、そういうのが広がってさ」

僕がそういうと、星は年相応の女の子らしい屈託の無い笑顔を浮かべながら目を閉じた。だから僕もそれにならって身を委ねるように目を閉じた。再び闇が広がる。隣には星の細い息使いが聞こえてきて、終いには、鼓動まで聞こえてきそうだ。

僕は再び、旅に出る。

星と、一緒に。

星が輝いている。

『ねえ』

隣に立ち、顔を上に向け、目を星空同様に輝かせながら、少女は言った。

『何？』

『ちよっと、寒いね』

確かに。いくら秋とはいえ、街を外れた公園で、しかも夜となれば寒い。これくらい寒いと、秋というよりも冬だ。今にもこの空から、流れ星みたいに雪が降り注ぎそう。

『こうすれば、』

そう言っ僕は、あまり力が入っていない綺麗な手を握る。冷え切った掌からは、冷たさの奥に、ちよっとの温かさを不思議と感じた。それがどういものかはわからないが、ただなんとなく、握った時にそう思ったのだ。

『寒くないよ』

『……うん』

僕たちの頬は、まだ見ぬアンタレスよりも、真っ赤に染まっていた。

星が、輝いている。

そんな、スクリーンを僕たちは想像した。

[This story is END;Our story is ENDLESS]